



●MIC2021 『今年の色』 応募のご案内

日本色彩学会では本年度も皆様から一年を代表する『今年の色』への応募をお待ちしております。

『MIC(Most Impressive Color)2021』～2021年を彩った色～として、一年間を色彩という目線から振り返り、その年のイメージを共有するべく、2021年を代表する色を決定いたします。

本年度は応募者優待として、2022年3月21日午後に、オンラインで開催を予定している International Colour Day (インターナショナル・カラー・デイ) のイベントに、参加費無料(希望者のみ)で、ご招待をさせていただきます。

日本色彩学会員の方はもちろん、非会員の方も応募は無料です。

色に関心のある幅広い方々の参加応募をお待ちしておりますので、色彩教材研究会に関わる皆様の参加応募のご協力を是非ともよろしくお願い申し上げます。

◆『今年の色』の応募締切：12月15日(水)

◆応募フォーム&詳細：

<https://forms.gle/YVKACjtkMuV6ez4E6>

この URL から、応募をお願いします。

(MIC・ICD 担当理事・高田瑠璃子)

海を渡った日本の Kimono の美意識

西欧の美術館に所蔵中の日本染織品調査が進められている。和服は三度、西欧で注目されている(深井晃子『きものとジャポニズム—西洋の眼が見た日本の美意識』平凡社、2017年を参照)。

最初は、17世紀にオランダ東インド会社を通じて渡洋し、珍重された。

二度目は1860年代前半のジャポニズムの影響で、フランスの芸術家たちが先導した。西欧美術では19世紀前半から東洋趣味が見られ、和服は、単なる異国趣味における日本表象の実用品から、高度に洗練されたデザインや染織技法、直裁的・包括的な表象性、暖かくて軽いという機能性にも注目された。

三度目は、日本が目覚ましい経済復興を果たした1980年代で、日本のファッション・デザイナーたち自身が主張と提案を行った。ルネサンス以来の伝統的な西欧の服作りには、立体である身体に合わせて裁断するという大原則があったが、平面性を基本とする和服の構成法は間の概念に、破れや色彩の抑制は侘び・寂びの美学に通じると解釈された。

和服の美意識は、糸が織り成す明暗、布がたわみ重なり合って生まれる色の濃淡にあるという考えも紹介されている。(吉村耕治)

●提案-24・研究会経理の改善

従来は、会場をお借りして、有料のイベントを開催していき色彩教材研究会は、コロナ禍のために、今年度は今までのイベントを全てオンラインで行い、参加費の集金が面倒なので、参加費を無料にしたため、距離の障害が無くなり一回あたりの参加者は増加したが、収入はゼロになりそうである。

よってコロナ禍解消後も対面とオンライン併用のイベントに移行するのが得策である。

そのために、学会全体として、イベントの入・出金を学会事務局に一本化してほしい。イベント参加費は全て事務局に振り込み、講師料他の支出も事務局に担当してほしい。交付金も廃止して、研究会などに売上高か利益額の予算を提示するだけにしたらどうだろう。振込手数料などの軽減にも繋がる。

イベント参加料の金額の下2桁を研究会ごとに指定しておく、振込額を見るだけでこのイベントの参加料かが判る仕組みになる。例えば色彩教材研究会の場合は、95として1,595円などの参加料にする。

No.221にも掲載したが、参加料集金業務も無くなり、幹事さんも助かることになる。

研究会だけでなく、支部にも適用できるシステムとして考えて欲しい。(永田泰弘)